

ミステリー小説としての『アブサロム、アブサロム！』 —現在と過去との二層構造

大 野 真*

ウィリアム・フォークナーの代表作『アブサロム、アブサロム！』は、クエンティン・コンプソンという一人の青年によるトマス・サトペン家に関する過去の謎への探求の物語である。この謎の探求過程において、アメリカ南部の歴史に潜む人種問題を始めとする様々な問題点が浮き彫りにされていく。批評家クリアンス・ブルックスが言うように、『アブサロム、アブサロム！』は、ある観点からは「素晴らしい探偵小説」(311)であるとも言えるのだ。クエンティンは推理や推測を通して過去の謎を解決しようとする探偵の役割を演じるのである。

この論考においては、『アブサロム、アブサロム！』をミステリー小説として、とりわけ、現在と過去の二層構造を持つミステリーとして論じてみたい。

1. 謎めいた人物としてのサトペン

サトペンは『アブサロム、アブサロム！』の謎の中心となる人物である。『アブサロム、アブサロム！』の謎の多くはサトペンをめぐって展開する。

サトペンは突然どこからともなくヨクナパトーファ郡に現れた謎の男である。サトペンについての物語の語り手の一人であるローザ・コールドフィールドは、正体不明の謎の人物である彼を「この悪魔 *this demon*」と呼ぶ(5)。

サトペンは連れてきたフランス人の建築家と黒人奴隷の団を用いて、大邸宅を築き始める。サトペンの黒人奴隷たちは英語ではなくて「一種のフランス語」を話す(27)。サトペンはまた、黒人奴隷と格闘することを楽しみ、「両者とも腰まで裸になって」(20) 獣のように取っ組み合うのであった。

サトペンは共同体における「よそ者 *stranger*」(23) である。サトペンが謎のよそ者であるために、共同体の人々は、あたかも彼が金もうけのために密かに犯罪を犯したかのごとく悪い噂を立てる。正体不明のよそ者は、噂をかき立て、増殖させる。よそ者は共同体の中での物語の磁場の中心となるのである。いくつか例を挙げてみよう。「…奴は略奪品を隠しておく何か独自の実際的な方法を見つけ、所持金を補充するために[金の] 隠し場所に戻ったんだ…」(26)「やあ、今度は奴はべらぼうにも汽船を丸ごと盗んだんだ！」(34)

サトペンの謎を解く鍵は彼の過去にあり、それは第7章で語られる。サトペンの物語はそれゆえに、現在と(隠された) 過去という二層構造を持つ。

サトペンはヴァージニアの山中で、貧乏白人の子供として生まれた。彼は富める者と貧しい者との間の違いを知らなかった。なぜなら、「彼の住んでいた所では、土地は誰のものでもあり、皆のものであった」(179) からだ。貧富の差を認識していないサトペンは、クエンティンの祖父が言うように、「無垢 *innocence*」な者だったのだ(178)。しかし、ある時、農園主の屋敷の玄関口で、黒人執事によって「裏口へまわれ」と侮辱されたことをきっかけに、彼は豊かな白人と貧しい白人の間には「差異 *difference*」があることを学ぶ(183)。富める者と貧しい者という人間の間の「差異」を知ることがサトペンのその後の経歴の出発点である。

それから彼は「本から」(195) の情報で西インド諸島での成功談を知る。「自分[サトペン] が知ったのは、西インド諸島と呼ばれる場所があって、そこに貧しい男たちが船に乗って行き、豊かになったということだった…」

(195) こうして彼は1823年、14歳（あるいは15歳）の時にハイチに行ったのだ。そこで彼はフランス語を学び(200)、金持ちになるために懸命に働く。彼には金持ちになるという「企図 design」があった(209)。サトベンはクエンティンの祖父に以下のように告白する。「自分〔サトベン〕には企図があった。それを達成するためには、金や家、農園、奴隷、家族——ついでながら、もちろん妻も手に入れる必要があった。自分はこれらを手に入れることに取りかかった、誰の好意も当てにせずに」(212)。「金、家、農園、奴隷、家族——ついでながら、もちろん妻」という言葉が示すように、サトベンの「企図」は父権的で王朝的な観念に取りつかれていたのである。

彼は西インド諸島で或る女性と結婚した—最初の結婚である。しかし、最初の妻が「部分的に黒人」(283)かもしれないと知った時、サトベンはその彼女を自分の企図に反する存在として退ける。さらにサトベン、最初の妻との息子であるボンも退けた。ボンもまた、その黒人の血の可能性ゆえに、「企図の絶対的かつ取り返しのつかない否定」(219)であったのだ。ボンの黒人の血は、サトベンの父権的で王朝的な企図の外側の何か、企図を危うくする何かを表す²¹。

ブルックスは言う。「・・・チャールズ・ボンを受け入れることは、サトベンの意見では、企図を危うくするものである。サトベンにとって事態は実際以下のように単純であった。彼は妻を憎んでいないし、その子供に対しての嫌悪感も持っていない。彼は愛していないのと同じく憎んでもいない。彼の情熱は全く企図にかかりきりなのだ。自らの肉親でさえもその企図から彼の心をそらすことは許されない」(Brooks 299)。かくして、ボンの存在はサトベンの人生の隠れた無意識の部分に抑圧されなければならない。

どこからともなく現れたよそ者としてのサトベンの謎は、彼の隠された過去にある。つまり、西インド諸島での最初の妻と息子における黒人の血の可能性である。西インド諸島での過去、とりわけ彼の最初の家族の黒人の血に関する過去は抑圧されねばならない。なぜならそれは彼の「企図」とは調和しないからだ。これが『アブサロム、アブサロム！』における第一の抑圧である。

しかし、ジョン・T・アーウィンが精神分析の理論に基づいて指摘したように、抑圧されたものは必ず回帰するのである(Irwin 83-84)。ボンの黒人の血に関する過去を抑圧したのは、サトベンの「企図」という物語を成立させるためであったが、『アブサロム、アブサロム！』においては物語を成立させる力と同時に物語を解体させる力が働くから²²、抑圧の力の反作用としての回帰する力も強烈に働く。

『アブサロム、アブサロム！』で、サトベンにより抑圧された過去は、最初の妻との息子であるボンの再出現という形を取って回帰するのである。

2. 謎めいた人物としてのボン

ボンはサトベンが最初の妻との間にもうけた息子である。しかし、サトベンの二番目の妻による息子のヘンリーと娘のジュディスの前にボンが一人の若者として現れる時、彼は自分が彼らの異母兄であるという事実を隠している。

サトベンがボンについての過去を抑圧（第一の抑圧）するように、ボン自身も自らの出生についての過去を抑圧する。これが第二の抑圧である。ボン自身がサトベンと同じく抑圧という行為を行う。ここから、ボンとサトベンに類似した性格（「謎の人物」という性格）が物語上で与えられることになる。

ボンは自らの過去を隠そうとするために、「謎めいた enigmatic」(74) 人物となる。どこからともなく現れた、謎めいたよそ者であるという点で、ボンは自分の父親であるサトベンに似ている。

サトベンの秘密が西インド諸島での過去と関わっている一方で、ボンの「秘密 secret」(73) はニューオーリンズでの過去に関わっている。ボンはニューオーリンズで育ち、そこで結婚して子供をもうけていたのだ。けれども、ヘンリーとジュディスの前に現れた時、彼は自分が息子のいる既婚者であるという事実を隠す。これが過去についての第三の抑圧である。ボンがヘンリーによって射殺された4年後になって、ジュディスは「もう一人の女性とその子供

の写真」(71)を発見するのだ。

ボンは自分の最初の結婚と息子についての過去を隠す。ちょうど、ボンの父親のサトベンが最初の結婚とそれによる息子[ボン]についての過去を隠していたように、サトベンの物語と同じように、ボンの物語は現在と隠された秘密の過去という二層構造を持つ。サトベンさらにボンにおける二層構造の反復が『アブサロム、アブサロム!』の大きな特徴である。

かくしてボンはヘンリーとジュディスの前に、異母兄という事実を隠して、秘密を持つ謎の男として現れる。ボンの謎めいた性格は他の人たちの好奇心と想像力をかき立て、彼を魅力のある人間にさせる。サトベンの場合と同じく、ボンの謎は彼を物語的な磁力の中心に置くのだ。例えば、ヘンリーはボンに憧れ、彼を模倣する。「[ヘンリーは]彼の服装や仕草、さらに(出来る限りに)彼の生き方そのものを真似して、ボンのことを何やら青年向けの千夜一夜物語から現れた主人公であるかのごとく憧れた・・・」(76)ジュディスもまたボンに引き付けられて彼と婚約するのである。

フォークナーがヘンリーのボンに対する憧れを描く際に、二人の若者の間の様々な対照が導入される。ヘンリーは「田舎の」(252)ミシシッピ州に育った「世馴れない」(80)「田舎者」(90)である一方、ボンはフランス語も話されている「国際色のある」(252)ニューオーリンズから来て、年齢も上だし、人生経験も積んでいる(76, 85)²³。ヘンリーは「清教徒」(89)である一方、ボンは「ある種のカトリック教徒」(75)である。

女性についての見方もまた異なる。ヘンリーは、「異性が三つの明確な区分に分けられている環境」の中で育ち暮らしており、そこでは、紳士が将来結婚する処女と、紳士が都会に休暇に行ったときに通う娼婦と、奴隷の女とに女性区分されていた(87)。他方、ボンは女性の間にそのような区別を認めず、娼婦という存在も弁済する(93)。

このように、ヘンリーとボンという二人の青年を軸にして様々な二項対立的な対照が導入される。二項対立的な思考法は、レヴィ＝ストロースたち構造主義者がとりわけ重んじたものである。本論考の二層構造との関連でいえば、ヘンリーはサトベンのいわば表向きの息子である一方、ボンは抑圧された過去に属する、いわば裏の息子であるから、二人の二項対立的な対照は、表と裏の二層構造が人物の性格や思考様式、住む場所などの形で、物語の現在時点に共時的に顕在化したものだと言えるだろう。

ヘンリーは自分と対照的な性格を持つボンに引きつけられる。いわば二項対立の陽極が陰極に引かれるように、ヘンリーはボンに接近するのだが、対立項の接近は破局へとつながる。ボンはヘンリーの「教育役であり、墮落させる者」(88)として描かれる。ボンのヘンリーに対する影響は、人生の闇の部分へと導くのである。

ジュディスもまた謎めいたボンに引きつけられて婚約する。しかし、ボンがジュディスの異母兄であるために、彼らの婚約は近親相姦につながりうる。また、ボンは黒人の血を持つかもしれないために、白人と黒人の通婚にもなりうる。また、ボンにはすでに妻と息子がいるために、重婚にも結び付くのである。さらに、それは兄弟殺しにもつながる。ヘンリーは、ボンが自分の異母兄であり、さらに黒人との混血の疑いがあると知った後、ボンとジュディスとの間の結婚を防ぐためにボンを殺す。

こうして、サトベンとボンが隠して抑圧しようとした秘密の過去は、近親相姦、白人と黒人との通婚、重婚それに兄弟殺しといった主題に関わってくる。——それらは聖書やギリシャ神話に見出されるような主題であり、あるいは、南部の歴史に深く根付いた主題でもある。

こうした悲劇的な主題を生じさせるものは過去の抑圧なのである。しかし、抑圧された過去あるいは謎は結局帰帰し、サトベン家を破滅させるのだ。

3. 謎としての南部

第6章の冒頭で、カナダ人のシュリーヴはクエンティンに尋ねる。「南部についての話をしてくれ給え。そこでは

どんな感じなのか、そこでは人々は何をしているのか、そこでは人々はなぜ生きているのか、いったい何のために生きているのか」(142)。そして、『アブサロム、アブサロム!』の後半部で、クエンティンはシュリーヴとの対話を通じて、サトベン一家の物語をさらに語り続ける。

このように、この小説の後半部では、南部のアイデンティティーについての問い——「南部とは何か?」という問いが前景に出てくる。本論でこれまでに論じたサトベンとボンについての謎は、南部の歴史というさらに広い文脈の中で再検討されねばならない。

ここで、『アブサロム、アブサロム!』における「南部」とは、閉じた空間としてだけではなく、常に外界と交流している開かれた空間としても考えられる。例えば、『アブサロム、アブサロム!』は南北戦争を扱っており、そこでは南部が北部によって侵入される。さらに、『アブサロム、アブサロム!』における「南」は合衆国の南部に限定されない。サトベンが謎めいたよそ者として初めてジェファソンに現れた時、彼は「南から from the south」町にやってきた者として描かれているのである。「彼[サトベン]は見たところ南から町にやって来たようだった」(24)。

サトベンが西インド諸島から来たのだから、「南 the south」とは、合衆国の南部だけではなく、西インド諸島を含むさらに広大な領域を意味する。フォークナーが自分の作品で描いたヨクナパトーファ郡は、西インド諸島に関連したものとして考えられ、さらに、黒人たちがやって来たアフリカ大陸とも結びつく。

西インド諸島はアフリカ大陸の密林と合衆国南部との「中間地点 halfway point」として描かれる。「我々が密林と呼ぶものと文明と呼ぶものとの中間地点、黒人の血、黒人の骨と肉と思考と記憶と希望と欲望が暴力によって奪われた暗黒の不可思議な大陸と、黒人の血が運命づけられた冷たい既知の土地との中間・・・」(202)

南部とは何か?——南部のアイデンティティーについてのこの問いを『アブサロム、アブサロム!』が問う時、南部は外部の世界との交流において検討される。しかし、我々はともすれば南部を合衆国内部の閉じた空間に限定しがちであるから、外部の世界とのこうした交流は抑圧されてしまう。サトベンの人生においても西インド諸島は抑圧された過去に位置づけられ、西インド諸島はいわば「無意識の南部」となるのである。

しかし、『アブサロム、アブサロム!』の二層構造が現在と過去という縦の時間軸だけではなく、閉じられた空間と開かれた空間という空間的な広がりも持っていることは注目し値する。フォークナーの中心的主題の一つとされてきた「時間」という縦軸の支配を脱却する可能性を、横軸に開かれた空間は示唆しているのである。

4. 現在による過去への暴力的侵入—秘密の暴露と未来像

『アブサロム、アブサロム!』の後半部の中心的な謎は、サトベン家の屋敷に隠れた「何か something」についてのものである。サトベン家の内部は謎の発信源として物語の磁場の中心となる。

第5章の最後の場面で、ローザはクエンティンに対して、4年の間サトベン家に何かが隠れていたはずだと打ち明ける。

「何かがあの家に隠れているわ。」

「あの家に? クライティーのことだろう。彼女は——」

「いいえ。何か生きているものがあの中にいるわ。あの中に隠れているのよ。四年間の間あそこにて、あの家に隠れて生きているのよ」(140)

過去の秘密を表す「何か」が家の内側に隠れている。これまでに、サトベンとボンの場合において、現在と隠れた過去との二層構造があることを見てきた。顕在内容と潜在内容の二層構造は、ここで家屋をめぐる空間の構造に移し替えられる。つまり、サトベン家の外側と内側である。

『アブサロム、アブサロム!』の後半部において、家に隠れているものについてのサスペンスが徐々に高まっていく。第6章の終りで、シュリーヴは家に隠れている謎の人物の正体をクエンティンに尋ね、それがクライティーやジム・ボンドではなくて他の者であることを知る。「だが、この老嬢、このローザ伯母が君〔クエンティン〕に誰かがあそこに隠れていると教え、君がそれはクライティーかジム・ボンドだろうと言うと彼女は違うと言い・・・」(175) このように、なかなか謎の人物の正体を出さず、初めて読む読者をやきもきさせるのである。

最終章において、クエンティンはローザと共にサトペン家に行く。ローザはクエンティンに対して、鍵がかかり釘で閉じられたドアを手斧で叩き破るようにと頼む(293)。彼らは家に入り、そして部屋に潜んでいるヘンリーを見つける。ヘンリーは衰弱しきった状態でベッドに横たわっており、いわば「死ぬために To die」家に戻ってから4年の間、部屋に潜んでいたのである(298)。

この最後の章まで、クエンティンはサトペン家の過去を他者との対話を通じて、つまり言葉を通じて探求してきた。しかし、ドアを手斧で叩き破って家屋の内部に侵入することは直接的行動であり、それは、いわば過去に対する暴力的侵入を意味する²⁴。

『アブサロム、アブサロム!』において、過去の謎は古い家屋の内部への暴力的侵入——言い換えると、現在による過去への暴力的侵入——によって暴かれる。それまで謎を作って来た顕在的内容と潜在的内容の二層的構造はついに崩壊するのである。

さて、クエンティンたちがヘンリーを発見してから約3ヶ月後、ヘンリーを町に連れて行って医者に見せるための救急車が家に近づいてきた時に、クライティーは、「チャールズ・ボンを撃ったことで白人たちがヘンリーを絞首刑にする目的で町に連れて行こうとしている」(299)と誤解して、家に放火する。

ヘンリーとクライティーは火事の中で死ぬが、ジム・ボンド(ボンの息子であるチャールズ・エティエンヌ・ド・セント・ヴァレリー・ボンの息子)は、逃れてサトペン屋敷から姿を消す。そして、サトペン家の唯一の生き残りであるジム・ボンドが現在どこで生きているのか知る者は誰もいない——「消息不明」(巻末系図 309)。

『アブサロム、アブサロム!』の最終場面において、シュリーヴはクエンティンに以下のように言う。

「それでは僕の考えを言うことにしよう。僕の考えでは、いずれジム・ボンドの一族が西半球を征服することだろうね。もちろん僕たちの時代においては 아닐だろうし、もちろん彼らが両極に広がるにつれて彼らはウサギや鳥がそうなるように再びすっかり色白になり、雪を背景にしてもあまり目立つことはなくなるだろう。けれどもやはりそれはジム・ボンドなんだ。そして数千年もたてば、こうして君を見ている僕もまた、アフリカの王の腰から生まれてくることになるだろうね」(302)

こうして、現在と過去との二層構造は崩れ、未来が我々に開けることになる。ジム・ボンドの一族が両極に広がっていく未来、サトペン家の家屋に象徴されるアメリカ南部の閉じられた空間は崩壊し、開かれた空間へと拡散していく可能性が示される。ポール・ジャイルズの言う脱領土化としての惑星思考がうかがわれる個所でもある。

しかし、本当に『アブサロム、アブサロム!』における謎は解明され、また、クエンティンは二層構造の呪縛から解放されたのであろうか? この問いに対しては、『アブサロム、アブサロム!』のテキスト中の上述の引用に続く個所を読んで考えてみたい。

『アブサロム、アブサロム!』はシュリーヴの問いとクエンティンの答えによって終わる。

「・・・さて、君にもう一つだけ答えてほしいな。どうして君は南部を憎んでいるんだい？」

「憎んでいないさ」クエンティンは言った。素早く、直ぐに、間髪をいれずに、「憎んでいないさ」彼は言った。憎んじやないと彼は思った、ニューイングランドの鋼のような闇の、冷たい空気の中であえぎながら、ちがう、ちがう！憎んじやいない！憎んじやいない！（303）

「憎んでいない I don't hate it」というクエンティンの答えは、「僕は南部を愛している I love the South」でも「僕は南部を憎んでいる I hate the South」でもない。南部に対する彼の感情は両義的であり、愛と憎悪の間で宙づりになっている。

クエンティンがサトペン家に潜むヘンリーを見つけて、家に隠れた「何か」についての謎は暴かれたものの、「南部とは何か？」あるいはクエンティンにとって南部とはどういう存在であるか、というもう一つの、より深い謎は残るのである。

とくに注意したいのは、クエンティンの南部に対する感情自体に二層性の中での揺らぎが見られることだ。「僕は南部を愛している」という場合の南部は表向きの南部であり、「僕は南部を憎んでいる」という場合は裏面の南部であろう。サトペンの生涯は、無一文から一代で独力によって屋敷を作り上げた（建国の英雄を思わせる）英雄的な生涯であるとともに、その過程で抑圧排除された様々な負の側面を体現している。サトペン家についての探究を通じて、クエンティンは南部そのものの正と負の二層構造を知ったのだ。

「僕は憎んじやいない」というクエンティンの言葉は、南部の歴史そのものの二層性に引き裂かれ、愛と憎悪のどちらの態度も明確にはとれずに宙吊りにされた精神状態を示している。ここにおいて、南部の二層性はクエンティンの心の中に一つの大きなパラドクスとして内面化されたのだ。

『アブサロム、アブサロム！』の物語の後半で、南部の現在と過去の二層性はサトペン家の屋敷の外部と内部という空間的な二層性に移し替えられて、サトペン屋敷が焼失するとともに、空間的な二層性も崩壊した。しかし、物体としてのサトペン屋敷は消えても、その二層性のパラドクスはクエンティンの心の中に内面化されてしまう。

この後のクエンティン、つまり『響きと怒り』で描かれたクエンティンは、現在と過去に分裂した精神状態に押しつぶされ、結局のところ自らの命を絶つ。

しかし、作者フォークナーの場合は、こうした二層性の呪縛そのものを受け止めて、作品の中で描き出すことにより、『アブサロム、アブサロム！』という一つの芸術作品として昇華せしめたのである。

注

1. ジョン・T・マッシュズは以下のように言う。「しかし、『アブサロム、アブサロム！』は王朝的な意味を持つサトペンの陳述を解体する。なぜなら、それは言語の複雑性を無視しているからだ」（156-57）。『アブサロム、アブサロム！』は、サトペンの物語——父権的で王朝的な企図——を描くと共に、同時に、その物語を解体させるような要因——ボンの黒人の血の可能性——を導入する。物語の成立と解体の両方を併せ持つ点に、一元的な物語に集約されない『アブサロム、アブサロム！』の複雑性、多層的な豊かさがある。
2. 林文代は、エントロピー説を念頭に置いたうえで、サトペンは〈分離（秩序）／差異を志向する力〉を、ボンは〈混合（無秩序）／差異を消去する力〉を表すとし、『アブサロム、アブサロム！』にはこうした秩序を志向する力と無秩序を志向する力のせめぎあいがあると指摘している（林 213-14）。林が言う秩序を志向する力と無秩序を志向する力のせめぎあいは、物語を成立させる力と解体させる力との抗争と言い換えられるのである。
3. ヨクナパトーフ郡とニューオーリンズとの対照は、ボンの息子であるチャールズ・エティエンヌ・ド・セント・ヴァレリー・ボンにおいて反復される。彼が十二歳の時にニューオーリンズからサトペン屋敷に連れてこられた時、彼はフランス語を話していて、英語を話せなかった（159）。彼はそこでの生活に適応できず、結局、異なる

文化の中の「孤独な子供」(166)のままだった。

4. それはまた、「エミリーへの薔薇」の最終場面を思い起こさせる。この短編の最終章で、葬式のためにエミリーの家に来た町の人々は、「階段の上の、四〇年間誰も見た者のいない領域にあり、強引にこじ開けなければ入れないような一室」(129)の内側を見たがる。葬式の後で、彼らはドアを破って部屋に入る。そして、婚礼用のように飾られた部屋のベッドの上で横たわる死体を発見する。その死体はエミリーの恋人で何年間も行方不明となっていたホーマー・パロンのものであった。エミリーは彼を砒素で殺し、死体を部屋に隠して、時々ベッドの上で抱擁していたのである。以上が、正面のドアが長年にわたって他の者には閉ざされていたエミリーの家に隠された秘密である。『アブサロム、アブサロム！』の場合と同様に、謎は古い家屋の内側にあるのだ。

引用文献

Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale UP, 1966.

Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. NY: Vintage International, 1990.

---. "A Rose for Emily." *Collected Stories of William Faulkner*. NY: Vintage International, 1995. 119-30.

Iwrin, John T. *Doubling and Incest/Repetition and Revenge: A Speculative Reading of Faulkner*.

Baltimore: Johns Hopkins UP, 1975.

Matthews, John T. *The Play of Faulkner's Language*. Ithaca: Cornell UP, 1982.

林文代『迷宮としてのテキスト——フォークナーのエクリチュールへの誘い』東京大学出版会、2004年。